

11章

記憶を活かした風景の再生

—大槌町の実践より—

窪田亜矢

11-1 復興まちづくり計画における記憶の意義

1 復興まちづくり計画における本質

本稿で報告する^{おおづちちょう}大槌町の事例に入る前に、復興まちづくり計画の本質とは何か、を最初に述べて筆者の捉え方を明らかにしておきたい。

被災後の復興という局面において、失われた物理的環境を再建し、生活の舞台をつくりなおすことは必要である。当然、それぞれのまちに必要な復興まちづくり計画の中身はそれぞれで異なる。

復興が必要な事態とは、被災したということである。それは大切な人や生活の基盤を失ったということの意味し得る。たわいもないおしゃべりをしていた日常の場所が失われたということである。被災者お一人お一人の精神的な思いが癒えることはもっとも重要なことではあるが、そこに直接的に働きかけるだけでなく、共同体の日常生活を取り戻すことによってお一人お一人が生きていこうと思えるようになることもあるだろう。

復興まちづくり計画は、そうした日常生活を送るための時間と空間を取り戻すことを目的の一つとして含むことが、平常時のまちづくり計画とは大きく異なる点であると捉える。

2 日常生活の時間と空間

日常生活を送るための時間と空間が何を意味するのかは、それぞれのまちによって異なる。

通学が楽しかった小学生は、また元の友達と同じ小学校に通うのが日常かも知れない。しかし校舎が低地にあって波をかぶってしまったので移転しなければならないという状況があり得る。友達も全員そろわないかも知れない。しかし校庭から海が見えたこと、そこで野球をやったこと、春には校庭の桜が見事な花を咲かせて花見をしたこと、そういう記憶は継承できる。そうした空間を再生し、放課後にゆっくり遊べるような時間があれば、またもう一度、大切な記憶と同じような体験をすることはできる。

復興まちづくり計画に、上記の意味での時間を計画の対象要素として組み込むのは難しく、これまでの計画論では対応できない。しかし空間からのアプローチとして、桜の場所を確保することはできる。空間を仕掛けておいて、そこで流れる時間が記憶の追体験であるような計画を立てることはできる。

復興まちづくり計画という名のもとで出来上がった空間で、日常生活を営み、これまでの記憶に似ているけれども新しい経験を積み重ねて行くこと、その時間の中で、そのまちならではの人と人との関係を築いていくこと、そうした結果として、そのまちの風景が再生されていく。

それが本稿でめざしている、記憶を活かした風景の再生である。

11-2 大槌町の状況と震災被害

1 大槌町の歴史的変遷

以上をふまえて、大槌町で展開している記憶を活かした風景の再生について、報告したい。具体的には、復興を目的としている NPO 法人「おらが大槌」の方と協働で東京大学都市工学科の有志チームが実践してきた、記憶の収集と分

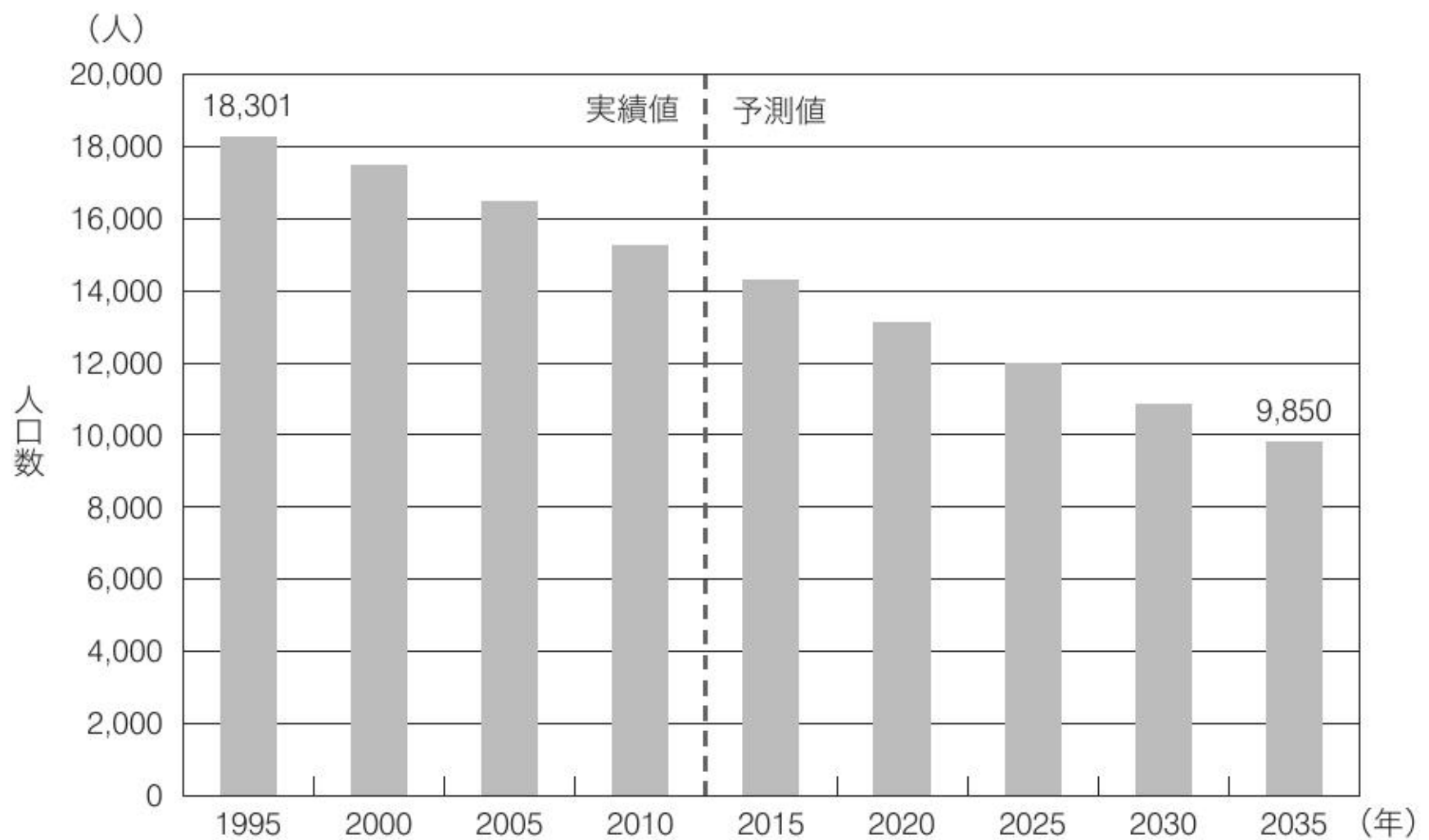


図1 大槌町の人口変化 (出典：国立社会保障・人口問題研究所推計をもとに作成)

析、共有についてである。

まず、岩手県大槌町の概要を述べておく。

大槌町の人口は、震災前は1万5,293人(2010年10月1日現在)であったが、30年前(1980年)の実績値は2万1,292人で最高を記録している。しかし、その後は、15年前(1995年)に1万8,301人と減少しており、25年後(2035年)は予測値ではあるけれど9,850人という激しい人口減少過程にあった(図1)。高齢化も進んでおり、特に二十代は極端に少ない。

サケマスをはじめとして海洋漁業も古くから続いてきた。寒流の親潮と暖流の黒潮がぶつかる潮目が三陸沖に位置し、海産物が豊富だった。沈降型のリアス式海岸を活かした沿岸漁業は、近世になって東廻り航路が整備されてから急成長した。近代では養殖漁業も盛んになった。しかし2005年の統計資料(国勢調査)によれば、漁師として生計を立てていた人は6%に満たなくなっていた。

鎖国していた江戸時代において、海外貿易は長崎港で集中的に行われていた。その長崎港から出荷する「長崎俵物」の材料となる海産物、特に、昆布、干しアワビ、海^{いりこ}参、^{ふかひれ}鱻鰭などを卸すことで、大槌町の前川善兵衛は財を成した。前川家は当時の東北地方に顕著であった「大規模イエ経営体」の一つとして活躍し、

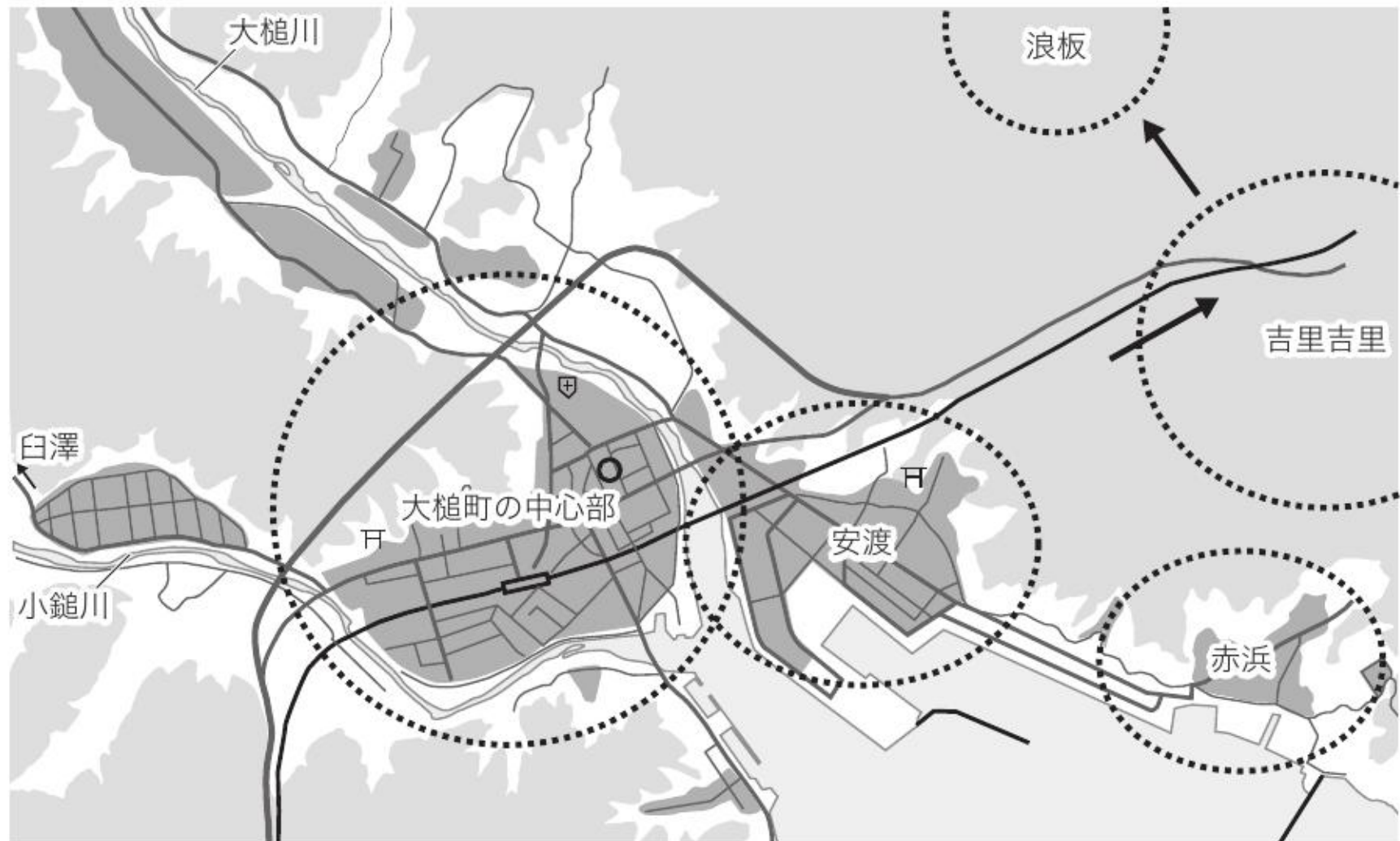


図2 複数の集落から構成される大槌町（一部）

大槌町吉里吉里に居を構えていた（斎藤、2012）。大規模イエ経営体は、海上交通と陸上交通の結節点を中心とした縄張りを持っていた。山から産出される金や鉄でも儲けていた。すでに鉱山は閉山となっているが、そうした海と山の交流があったことは、祭りにも継承されている。山の神様である鹿子踊りと海、特に漁師の無事の帰還を願う虎舞が両方見られるのだ。周辺の鉱山が非常に豊かであったことは、日本初の洋式高炉を導入した橋野高炉や釜石の製鉄業の隆盛からも推測できよう。大槌町の山奥部には金沢という地名の集落もある。

これらの海と山の産物は、盛岡藩にとって重要な資源であり、閉伊郡の中でも大槌があった南閉伊には代官所が置かれた。地域の中心として大槌が機能してきた。近代以降は製鉄の中心としての釜石に経済的な集積が進み、大槌は釜石のベッドタウンとしての性格を帯びるようになり、従業員住宅もつくられた。経済の中心は、大槌から釜石に移った。しかし、その釜石でも特に1980年代以降になって、製鉄の縮退時期を迎えた。

2 大槌町の震災被害と復興

次に、これまでの震災復興について見ておこう。

三陸海岸沿いは地震と津波の常襲地帯といわれているが、近年だけでも 1856 年（安政 5 年）、1896 年（明治 29 年）、1933 年（昭和 8 年）、1960 年（昭和 35 年）と、大規模な津波が確認されている。

なかでも明治三陸地震の津波は、日清戦争の帰還兵士のお祝いと、旧暦の端午の節句が重なり、避難行動が進まず、三陸全体で 2 万人、大槌町でも 600 人程度の死亡者を出している。

また昭和三陸地震後の復興計画においては集団での高台移転のみならず、味噌等の共同作業所を設けて職場をつくることで、経済的な点からも共同体として難局を乗り切ろうとするものもあった（大槌町吉里々々部落新漁村建設計画要項、図 3）。吉里吉里での高台移転地は、^{あまてらすみおやじんじゃ}天照御祖神社（図 3 の中央、浴場ポンプ場の北のあたり）の前に整然と平行する二本の住宅街であったが、^{うえじゅうたく}上住宅、^{したじゅうたく}下住宅と呼ばれて、地域社会の新たな中心として機能した。しかし今回の津波は、このときに高台移転した住宅の多くも流してしまっている。

昭和三陸の復興を記念した絵葉書を見ると、街路に対して破風を設けた住宅

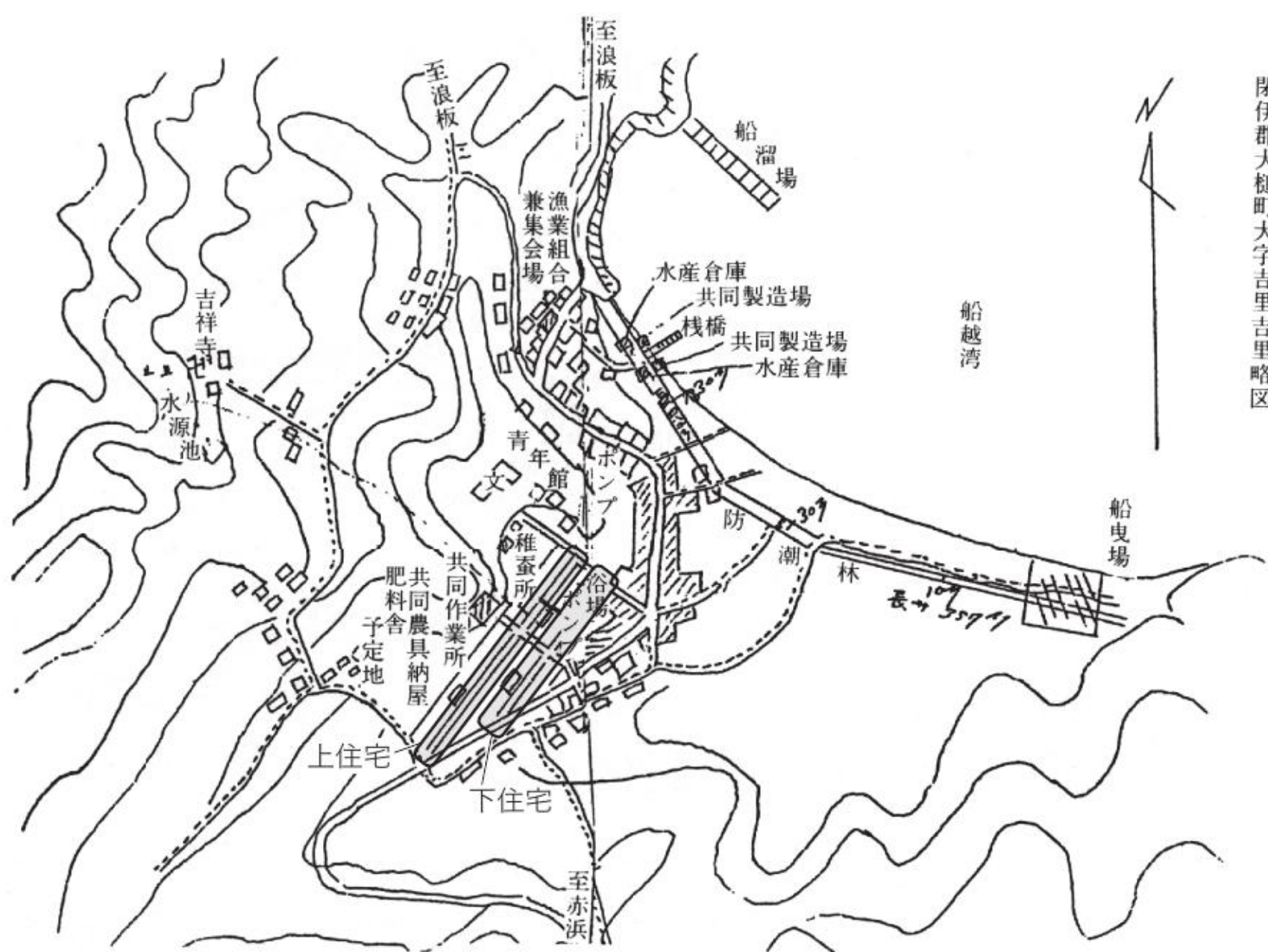


図 3 大槌町吉里々々部落新漁村建設計画要項



写真1 昭和三陸津波の復興(吉里吉里住宅による町並み) (写真提供: 藤本俊明)



写真2 昭和三陸津波の復興(共同浴場) (写真提供: 藤本俊明)

のデザインや共同浴場の個性豊かなファサードが注目される。ただ建て直したというだけではなく、魅力的な空間をつくり上げようとしていたことがわかる(写真1、2)。

このように、昭和三陸地震の直後までは、津波に対する備えが為されたといっただけではなく、魅力的な空間をつくり上げようとしていたことがわかる(写真1、2)。

このように、昭和三陸地震の直後までは、津波に対する備えが為されたといっただけではなく、魅力的な空間をつくり上げようとしていたことがわかる(写真1、2)。

このように、昭和三陸地震の直後までは、津波に対する備えが為されたといっただけではなく、魅力的な空間をつくり上げようとしていたことがわかる(写真1、2)。

大槌川河口部での埋立も著しかった。埋立地では町による宅地造成工事が進められ、町営住宅も20戸建設された。病院や町役場等の重要な公共施設も次第に海側に出て行く。東日本大震災の被災後の今、お話を伺うと、地域の方々の中には、これらの整備に対して、批判的な方も少なくない。1960年のチリ地震津波の被害が軽微だったことが、こうした事態につながったのではないかと述懐する声も多い(図4)。

3 東日本大震災の被災と復興状況

大槌町での東日本大震災の震度は6弱(釜石市)であり、被災状況は表1の通りである(2011年11月30日現在の大槌町役場ホームページと「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」2011年12月策定を情報源としている)。



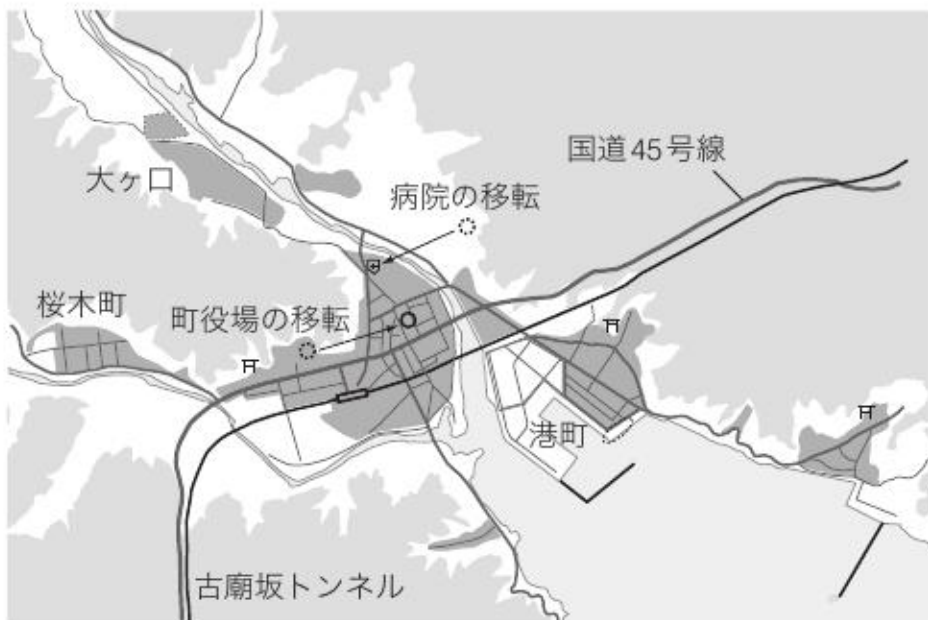
1916

江戸時代の代官所付近に町役場があり、小鎚神社から江岸寺までの浜街道沿いがまちの中心だった。



1952

昭和三陸津波後、洲崎海岸に防潮林(緩衝地帯)。市街地の前面には防潮堤。安渡、小枕、惣川では、集落の高台移転も行われた。1938年大槌駅設置。



1972

大槌川と小鎚川の流路変更、湾の埋め立て。1960年代中頃から桜木町・大ヶ口(釜石製鉄所の従業員住宅)、港町(大槌湾の埋め立て地)で宅地造成事業。1960年代後半に国道45号線大槌-吉里吉里間、古廟坂トンネル開通。



2001

国道45号大槌バイパス開通。駅南への住宅の立地が進む。高齢化などにより空き家も増えていた。

図4 大槌町の歴史的変容 (出典：萩原拓也・田中暁子作成)

表 1 地域別被災者の状況（2011年11月30日現在）

地域名	人口 (人)	世帯数 (世帯)	死者 (人)	行方不明者 (人)	被災者数 (人)	被災者率 (%)
町方	4,483	1,853	343	325	668	14.9
桜木町・花輪田	1,421	579	19	5	24	1.7
小枕・伸松	272	110	28	14	42	15.4
沢山・源水・大ケ口	3,104	1,195	60	19	79	2.5
安渡	1,953	824	161	57	218	11.2
赤浜	938	371	53	42	95	10.1
吉里吉里	2,475	954	72	28	100	4.0
浪板	404	143	13	11	24	5.9
小鎚	499	200	1	2	3	0.6
金沢	509	179	1	2	3	0.6
合計	1万6,058	6,408	751	505	1,256	7.8

注：人口は2011年2月28日現在（外国人を含む）。死者には震災後の死者を除く。

（出典：大槌町民生部町民課）

人的被害は、死亡者751人、行方不明者505人となっている。浸水面積は住宅地や市街地面積の52%を占める4km²、全壊半壊した建物は3,717棟、一部損壊161棟を合わせると、全家屋の約60%が被災したことになる。

また、集落によって被災率は大きく異なり、その原因については、今後、説明すべきであろう。

浸水高も集落によって異なるが、大槌湾からの津波が襲った、町役場付近で10.7m、安渡の新港町で12.7m、赤浜12.9mであり、船越湾では吉里吉里16.1m、浪板（ただし津波遡上高）19.1m、もっとも高い吉里吉里漁港東側で22.2mなどとなっている。

震災当日に城山公園体育館等に避難所が設置され、3月16日の時点で最大6,173人が避難した。4月29日の吉里吉里仮設団地設置以降、仮設住宅への移行が始まり、2011年8月11日に残っていた城山公園体育館、安渡^{あんど}小学校、吉里吉里地区体育館の3ヶ所の避難所が閉鎖された。仮設団地は48団地、2,106戸の住宅が整備され、2,080世帯4,769人が利用している。

発災直後から、多くの民間人がいわゆるボランティアとして働いており、大槌町社会福祉協議会が把握している数だけでも3,518団体、4万9,029人に及んでいる。例えば、「遠野まごころネット」では、白澤の避難所に避難していたメンバーと連携しながら、毎朝、食べ物を運び入れ、住民らの交流の場となった

「まごころ広場」の運営を支援し続けた。

自衛隊等による人命救助や瓦礫処理も目立った活動となった。

しばしば大槌町の復興は遅いと指摘されてきた。その背景には町長以下、町の幹部職員の多くが、町役場での会議中に被災し、命を落とした方が多かったことによる。選挙人名簿をつくるだけでも大変な労力を必要とした。ようやく為された2011年8月の町長選挙で、^{いかりがわゆたか}碓川豊町長が選出され、復興計画策定に向けて動き出した。新町長のマニフェストは、「海の見えるつい散歩がしたくなるこだわりのある『美しいまち』」の再生と、住民が決めていくボトムアップ型のまちづくりであった。公約通りに集落ごとにまちづくりプランを策定するための会議が開催された。

2012年度からは、2011年12月に策定された復興計画の実現に向けて、全国から集まった、非常に優秀な自治体職員が町役場に長期的に応援職員として配属され、大きな推進力となっている（2012年10月現在）。

11-3 | 記憶を再生するプロセス

1 古写真と地図による聞き書きを通じた記憶の蓄積

復興まちづくり計画によって記憶を活かすためには、記憶となっている空間が、どのような要素によってどのように構成されていたのか、という点から整理して理解する必要がある。

そのような目的に相応しい媒体として、地図と写真が挙げられる。

地図を読み慣れている人は必ずしも多くはない。しかし住み慣れた地域の地図を、大きくプリントアウトして広げると、ほとんどの方が、大きな目印になるもの、例えば川や山や神社などを見つけ出して、道路網を確認し、自分の家の近くにあった郵便局や特徴のある交差点を見つけて、自分の家を発見する。そうした時間は非常に楽しそうに見える。

さらに楽しい時間となるのが、昔の写真を見るときである。たとえば自分が写

っていないなくても、今は大きく変わってしまったまちの風景の写真は記憶を呼び覚ます。そういえばこのグラウンドでは町内運動会があつてね…など、運動会の写真が出てこなければ、語られないことも多い。

こうした、ともすると埋没してしまいがちな記憶は、特に注意して掘り起こす必要がある。被災者の方は、非常時に置かれており、重要な記憶をすべて語れるはずがないからだ。

しかし、一方で別の配慮も重要である。運動会の写真がたまたまあると、それに関連した記憶が必要以上に強調されてしまう点だ。運動会に関する記憶が多く語られた、だからグラウンドが非常に大事でまちの重要な場所に置くべきだという考え方を、復興まちづくり計画において安易に採るべきではないだろう。それでも敢えて、記憶の丁寧な収集の重要性を強調するのは、何が大事で何が大事でないかという判断は、次の段階のこととして行えば良いことだからだ。

誰も使わない緑地や公園を、設計者の好みで設置しても意味がない。設計者にとって美しいと思うものでも地域にとって愛着の持てる空間にならないなら、つくらないほうが良い。それどころか害悪になってしまう。初期投資は直接的に被災地の負担にはならないかも知れないが、永きに渡って維持費がかかる。また、設計者のひとりよがりの空間ができるということは、他の空間であったならば良く使われたかも知れない可能性をつぶすことでもある。現在の復興支援のあり方の問題にもつながるが、町民の記憶を反映させるワークショップを徹底して展開するか、もしくは、性急にすべてを計画で決めてしまつて整備してしまうのではなくて、使い勝手に応じて、少しずつ手が加わっていくようなところまでで最初の整備はとどめておくという時間のプログラムが必要だ。

今回の実践においては「記憶再生プロジェクト」として、写真をお持ちの方には持参ただいてその思い出を語っていただくことにした。写真が流されてしまっているなど、お持ちでない方にも思い出語りはお願いした。2012年1月21、22日の土曜、日曜、合計10ヶ所で行い、東京大学都市デザイン研究室の学生を中心に19名が2～3名のチームに分かれて対応した。午前／午後に分けて、ショッピングセンター「マスト」や復興館などの全大槌町民が集まりやすい商業空間、被災していない公共施設、仮設住宅の集会所という3種類を設定した。桜木町地区の保健福祉会館では、桜木町の浸水が一部にとどまったので、

館長はじめ多くの方に写真を持参していただき、ご協力を得られた。

結果的には、町内外から 61 名の方から写真約 600 枚、映像 3 本、資料や本 13 冊をご提供いただいた。

必ずしも写真の数は多くはなかったが、地図上で思いがけないお話をじっくりお伺いすることもできた。吉里吉里地区体育館では、写真の収集が趣味だったという方から大判の航空写真をお借りすることもできた。

特に多かったのは、祭りの写真である。祭りのときにはわざわざ写真を撮ることも多かったという背景もあろうが、それぞれの祭り、特に小槌稲荷神社や大槌神社、吉里吉里の天照御祖神社の祭りは氏子が一つにまとまる重要な場であったことが理解される。小槌稲荷神社の宮司は、被災後、通常ほどの規模にはならなくても是が非でも祭りを執り行いたいという思いをおっしゃった。実際に、内外の様々な団体から支援をとりつけ、神輿のルートを縮小して 2011 年 9 月に祭りが行われた。位牌をもって駆けつけた方もいて、奉納舞である鹿子踊りや虎舞を涙ながらに見守った。被災前の行事を、被災前と同じようにやることに意義があったといえよう。

一方、大槌神社の宮司は、お祭りは収穫を祝うためのものであり、鎮魂のために喪に服するべきだという考えをお持ちで、開催しなかった。お祭りの意味まで考えての行動は、そうした背景が理解されれば、地域の方にも納得されるものであろう。お祭りを開くか開かないかの選択というよりは、地域に根付いたお祭りのあり方が地域と共有されることが重要だ。

漁業の風景を写した写真も多かった。大漁旗を掲げた漁船、浜での作業風景の他、祭りのときの神輿渡御の写真もあった。操業中の漁船と共にしばしば写っていたのは、小さい島である。赤浜であれば蓬莱島やらいおん島、吉里吉里であれば弁天島、浪板であれば野島がそれにあたる。リアス式海岸ならではの風景であろう。特に蓬莱島は、井上ひさしがひょうたん島として捉えたのではないかと想定されている、赤い灯台が設置されていた島であり、お祭りも開催され、思い出も大きかったことが察せられる。海辺での記憶は漁業に関連するものだけではなく、浪板や吉里吉里の砂浜では海水浴場として賑わっていた風景の写真が多々寄せられた。被災前の記憶とは、被災直前とは限らない。埋立前の砂浜に番屋が並んでいた時代についての貴重な写真も集まった。

町方では、御社地^{おしゃち}の写真や県道沿いの写真も多かった。しかし何気ないまちの風景写真というのは、なかなか撮っておかないもので、その多くを提供してくださったのは、町民ではなく、被災前に大槌町の中心市街地活性化等の仕事をしてきた都市計画コンサルタントの方々などであった。これらの日常的な風景写真に、町民の方々は大きな反応を示した。例えば飲み屋街の写真を前にして、「アルプス」という名前のスナックがあり、休日の1日、仲間と周辺のハイキングや登山をしてから飲むのが楽しみだったとして、詳細にハイキングコースを語ってくださった方もいた。こうしたハイキングコースは、見方を変えれば、避難路として今回も活用されたものである。その方自身も、最近足が悪くしてあまり登っていなかったが、あそこに山に通じるのぼり口があるということを知っていたから迷いなく逃げることができたという。日常生活と避難時の活動が重複していることの重要性は、さんざん指摘されているが、それを裏付ける記憶であり、また記憶を伺うことは、当時の生活のあり方を立体的に理解することであり、これからの復興まちづくり計画を立案するにも重要であることが改めて認識されよう。

日常の風景写真にはこのような価値があるため、アーカイブの整備が今後は望まれる。今回はたまたまそうした都市計画コンサルタントの方のご協力を得ることができたが、町が所有していた写真は、図書館と共に流されてしまっていた。安全な場所に保管しておかなければならない。

2 空き家活用サロンによる記憶の再現

吉里吉里という集落は、行政としては大槌町の一部であるが、地理的にも大槌町が大槌湾であるのに対して、船越湾に面しており、震災前から地域の方々にとっては別の集落であるという意識が強かったようだ。

そこで、吉里吉里を対象にして、前述の写真と思い出の聞き書きとは異なる手法で記憶の収集を行った。具体的には、空き家を活用した「思い出サロン」の開催である（写真3、4）。既述のように、昭和三陸地震による津波からの復興として形成された上住宅という通り沿いの^{かくぶん}角文商店は、被災前から商売は辞めていたが、以前は魚を中心とした万屋だった。人が店先に集まって賑わう場所



写真3 空き家を活用した「吉里吉里思い出サロン」



写真4 「思い出サロン」で使った吉里吉里の昭和初期の風景写真（写真提供：藤本俊明）

の一つであった。角文商店の店主だった方へのヒアリングによると、隣接する町家などは流されたが、当該店舗は鉄骨が入っていたうえに、魚を扱うために水を大量に流して清掃できるようにしていた開口がしっかりとられた造りだったことにより、今回の津波でも排水がうまくいって、流されずに済んだのだろうという。店主は、だいぶ前に夫を亡くしているが、神社の婦人部で活躍する等、社交的に活動されていらっしゃる。

この店主のご協力をいただき、いつもは板戸がはめられて閉まっている店舗を開けていただいた。大きな土間に、机と椅子を並べて、二つのシマをつくった。それぞれに白地図を広げて、天照御祖神社の宮司より提供いただいた古写真を並べ、震災前の吉里吉里の暮らしについてヒアリングを行った。ヒアリング参加者は、数としては20名弱にしか過ぎないが、わざわざ高台の仮設住宅から降りてきて話をしてくださり、数時間にわたって滞在された方も目立った。

非常に印象的であったのは、その日の夜の出来事であった。「思い出サロン」は、吉里吉里天照御祖神社の宵宮祭と同日の朝から午後遅めの時間帯まで開催していた。「思い出サロン」を終了したあとも、店主やそこにいた方々はそのまま椅子に座って話が続いた。夕方から宵宮祭が始まると、そうして開いていた角文商店に人が集まってきた。暗い中に明るく電気が灯り、子供達の笑い声が響き、年配の方々が通り沿いの椅子に腰を下ろし、それはまさしく被災前の上住宅のいつもの風景だったといえよう（写真5）。

ヒアリングの中でも頻繁に聞かれたが、吉里吉里には「お茶っこ」という文化があり、仲の良いお友達の家に入り込んで、特に女性の高齢者の場合は1



写真5 被災前の風景が再現された吉里吉里の祭りの夜

日中、お茶を飲んでおしゃべりをしていたという。人数はそれほど多くなく3人程度で、お茶っこの相手は大体決まっていた、ごく近隣に住んでいた方同士の集まりだったという。遠洋漁業の漁師の奥さんがお二人、養殖漁業の奥さんがお一人のお茶っこ仲間では、養殖漁業の漁師さんは毎日夕食をつくらなければならない

ので大変だったと楽しそうにお話くださった。

逆に、お茶っこ仲間をこえた人数で集まる機会はかなり限られていたこともわかった。農林水産省の補助で建てられた「地域資源創造センター」という名の施設が吉里吉里にはあるが、これに隣接するグラウンドで、町丁目対抗の運動会が1年に一度あった。吉里吉里集落の住民が一同に会するのは、その程度だったという。運動会は大変盛り上がったそうだ。

全吉里吉里住民で集まるというよりも、上住宅、下住宅に散在していた商店の店先で会話を交わすような集まり方のほうが吉里吉里の生活にとって大事だった。そうした店先での井戸端会議はしばしば見られていて、三軒くらい立ち寄ると午後が終わっていたということもあったという。商店街というほど商店が立ち並んでいたわけではないということだが、商店ではない住宅の場合には必ず南側に面して縁側があり、買い物客がその縁側に立ち寄るといった行為は、特に仲が良いわけではなくても頻繁に行われていたらしい。吉里吉里の生活の中心が上住宅／下住宅であり、商店だけではなく、普通の住宅においても吉里吉里の誰にでも開かれた空間を持っており、それらが混合して成り立っていたことが重要だ。

もともと海浜沿いに並んだ番屋を核とする漁村と、山沿いの斜面地の足下の塚鼻街道沿いに伸びる農村が、併存していたのが吉里吉里集落の特徴であった。特に昭和三陸地震の津波被災後に漁村が発展し、膨張する形で人口が増加していった。昭和三十年代から四十年代にかけては若者も多く、高校を卒業すると青年部と消防団に入ってはじめて一人前と認められたという。青年部では社交

ダンス大会等も行われ、男女の出会いの場として機能していた。また吉里吉里小学校、吉里吉里中学校に、全住民が通っていたということとも関係するだろうが、集落内部の結束力が大変強く、逆に他の集落とは仲が悪かったという。大槌の町方まで出かけるときには、他の集落の若者とぶつからないように気をつけた。そのためにわざわざ長いトンネルを歩くことも普通だったという。漁業をベースにする集落同士では、仲良くつきあうというよりは、お互いに切磋琢磨して競い合うほうがしっくりくるのだろう。

海浜では、養殖漁業に携わる者は主に夫婦で働いていた。養殖をやっていた女性は、そうした作業中に、ふと顔を上げたときに見える鯨山の風景が非常に美しく好きだとおっしゃった。それは、大祭の最初に行われる浜での大祓において、皆が共有している風景でもあった（写真6）。

これらの個々の記憶は、たかだか20名程度の方から偶然に記録できたものに過ぎない。しかし復興まちづくり計画を考えるにあたっては、例えば店舗を1ヶ所に集中せずに、分散させたほうが良いし、公民館の広場を過剰に大きくしてもあまり使われないだろうから小ぶりにして建物と一体的に使えるようにしておくべきであるし、お祭りのときに御旅所^{おたびしょ}として使える空地进行を適地に分散して確保しておくなど、空間づくりのポイントは了解できる。個人の住宅についても、通りに面して開放的な部分を確保しておけば、うまく使われるだろうことが期待できるし、それが人と人のつながりに大いに役立ち、これまでの暮らし方に合っていることは了解される。こうしたことは明白なように見えて、実際に家を建てるときに配慮されるとは限らない。地域住民の方に対して、空



写真6 吉里吉里天照御祖神社の大祓において鯨山を臨む

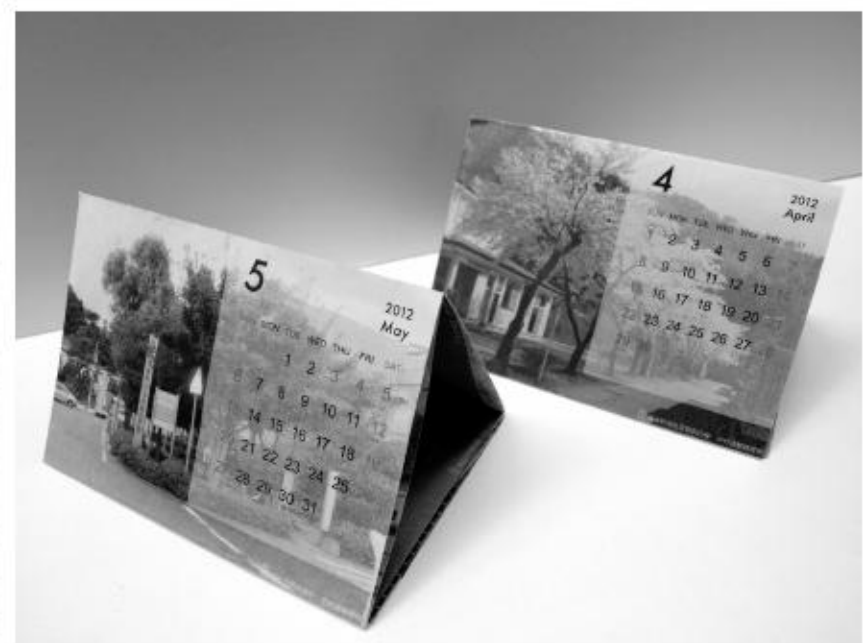


写真7 大槌の思い出カレンダー

間づくりに携わる者が空間言語につながる規範としてまとめて提示しなければご理解いただくことは難しい。

3 古写真カレンダーや思い出マップによる記憶の共有

被災前の暮らしに関わる記憶を広く共有していくことは、復興まちづくり計画に活かしていくべき記憶へと収斂させるときの出発点となるだろう。「記憶再生プロジェクト」については各月ごとのカレンダーにして、それぞれのご家庭やボランティアで大槌町にやってきて被災後の姿しか知らない人に手にとっていただいている（写真7）。被災前の暮らしを忘れないということはもちろんであるが、被災後にボランティア等で大槌にいらして、被災後の姿しか知らない方に大槌への理解を深めていただくという狙いもある。机に置いたり、壁に貼ったりすることができるようになっている。モノとしてのカレンダーの運営管理は、地元のNPO法人「おらが大槌」にお任せしている。

吉里吉里で開催した「思い出サロン」については「思い出マップ」に集約中である（2012年10月現在）。この狙いも上記のカレンダーと同様である。「思い出マップ」については、試案としてつくったものに基づく第二次ヒアリングを進めている途中である。こうしたカレンダー等の普及率や活用の成果についても、未だ包括的に調べられていないので、いずれ別の機会に報告したい。

いずれにしても、収集した記憶は収集で終わらせてしまうのではなく、それを共有していくツールを開発して実践していくことが重要である。

11-4 記憶を活かした復興まちづくり計画の展開に向けて

1 庭からはじめる復興まちづくり

最後に、記憶を活かした復興まちづくり計画のあり方として具体的な提案を挙げておきたい。

大槌町の中心地である、町方とよばれるエリアは、大槌川と小槌川が流れてきて出会ったところに形成されている沖積低地に立地している。こうした自然条件により、湧水が豊富だという特徴がある。場所によっては自噴井となる。これらの湧水や自噴井を活かして、震災前から水路がまちのなかをめぐり、そこから水を引き込んで庭に池をつくっていた家もあった。敷地の中に、コンクリートのタンクを埋め込み、そこに水を引き込む。台所のほうにも流して洗い物に使っていたという事例もあったらしい。

豆腐屋や造り酒屋（震災前にはすでになくなっていた）などのきれいな水があるからこそその生業もあった。県道より一本入った魚屋の存在も、ただで豊富に使える水があったからこそであり、魚屋の主人は自噴井や地下水を組み上げていた水道の手入れを、被災後にいち早く始めていた。

区画整理事業の選択や盛り土の整備もあり、今すぐどこでも住宅が再建できるわけではない。そこで、まず庭の手入れから、目に見える復興をはじめるというアプローチは重要である。庭は、町方の特徴であったようだ。同じ大槌町の中でも、町方ではない、例えば吉里吉里では「町方では庭をとろうとする、吉里吉里では家を大きくしようとする」という声も聴かれた。

そもそも湧水や自噴井は、町方という都市を支えてきた、もっとも重要な要素の一つである（写真8）。大槌町は沈降型のリアス式海岸の一部を占めているが、後背の岩盤が海際まで迫り、急激に落ちているために、掘れば自噴する被圧地下水層があるという状況が生まれる。岩盤のすぐ近くだと、被圧地下水層が岩盤にさえぎられてしまうし、あまり遠くだと海の中に入ってしまう。ちょ



写真8 被災後の大槌に見られる自噴井の活用

うど町方の中心市街地のあたりは、掘れば噴き出るという状態になる。しかしこうした地形的条件が、海岸沿いでそろそろは貴重であるという。そのために震災前から湧水等の科学研究者が大槌の自噴井や湧水を丁寧に調べていた。自噴井や湧水を活かして、街路沿いや港沿いにも、コンクリートの水槽が置かれていた。それらは、掘抜き、いぎつ、きつつ、いげつ等と呼称されていた。上水道がひかれた後も、湧水をくみ上げて飲み水に使っている状況もあった。

水が引き込まれた庭が少しずつ手入れされていく様は、町方らしい風景の再生に違いない。

2 記憶を活かした復興まちづくり計画

復興まちづくり計画に、記憶を活かしていくにあたって注意すべきことを列挙して本稿を閉じたい。

1 — 記憶の過大評価の忌避

まず、活かすべき記憶の判断が挙げられる。記憶であれば何でもそのまま継承すべきというわけではない。震災前の記憶は、震災直前のものと震災よりもずっと前のものが混ざっている。大槌町の歴史的変容でも見たように、特に高度経済成長期に入ってから、津波への警戒が薄れ、海沿いに脆弱な市街地がつくられてきた。どのような記憶なら継承したほうが良いのか、どのような記憶は物理的環境として継承すべきではないのか、判断する必要がある。

判断にあたって参照すべきは、集落の持続可能性という指標であろう。さらに、被災の記憶に頼りすぎないことも忘れてはならない。記憶の中の過去よりも小さな津波しか起きないわけではないからだ。

2 — 記憶再現の実現性

釜石のベッドタウンとなったあとに、その釜石の鉄鋼業も揺らいでしまい、長らく、自立的な経済基盤も失っている。そうした時代の前にあった、店舗がたくさん並んで商店街が賑やかで大漁旗が並んでいたという記憶は、楽しいものであろうが、再現することはできないだろう。つまり記憶の再生にあたって

は、今の大槌町で実現可能であり、持続可能であるものとして修正していくことも必要となる。

実現可能性の判断は、市場を読むという難しさに加えて、縮退化という直面したくない状況に被災者自身が向き合うことであるという厳しさもある。しかしむしろ直面しつつも、そのような状況であるからこそ記憶が有用な情報資源として活用されることに価値を見出すことができる。

3 — 事実と記憶の差異

既述のように避難の記憶は、復興まちづくりにおける避難行動計画のもっとも重要な情報となる。しかしその記憶を収集して活用するには様々な困難がある。一つは避難ができなかった方から記憶を伺うことはできないという点である。避難ができなかったことから学べることは非常に大きい。言い換えれば、避難に成功した方の記憶だけでは、また同じように災害が起こったときに、同じように亡くなる方が生じるであろう。

そもそも記憶は、正確さを求めるものではなく、何が心に強く残ったかを伺うものである。よって、例えば「そそり立つ擁壁に何とか捕まって逃げたのよ」という記憶があったとしても実際には緩やかな斜面であったということもあろう。現地で確かめられることなら構わないが、こうした記憶に基づいて、そそり立つ擁壁でも避難可能という判断をしてしまうのは間違っている。記憶と事実の違いについて細心の注意を払う必要がある。

これらのいくつもの注意点がありながらも、なお記憶を活かしたまちづくりが重要であるのは、復興まちづくり計画が単なる空間整備にとどまらないためである。空間の住まい手とつくり手が乖離してしまうことを防ぐためである。

参考文献

- ・岩手県大槌町（2011）「大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画」
- ・大槌町史編纂委員会編（1966）『大槌町史』上巻
- ・大槌町史編纂委員会編（1984）『大槌町史』下巻
- ・オギュスタン・ベルク（2011）『風景という知—近代のパラダイムを超えて』世界思想社
- ・斎藤善之（2012）「三陸沿岸地域における歴史的景観と生業—大規模イエ経営体と危機対応」、野村俊一、是澤紀子編著『建築遺産 保存と再生の思考—災害・空間・歴史』所収、東北大学出版会、pp.445-470